



大阪都心・三休橋筋におけるまちづくり活動 ～さまざまな担い手の自律的活動の積み重ねによるまちの変容～

三休橋筋愛好会 篠原 祥 (大阪ガス(株))

1. はじめに

大阪都心部では、2000年頃より業務単機能のまちから、賑わいがあり憩える楽しめるまちへ改変していこうという動きが活発化している。御堂筋では2001年に沿道の不動産所有企業有志の集まりである「御堂筋まちづくりネットワーク」が設立され、集客イベントを行うと共に道路空間の利用に関する提言をおこない、賑わいのあるまちへと変わりつつある。また歴史的都心である船場地区では、2004年に「船場げんきの会」が設立され船場の活動グループのプラットフォーム的な役割を担い、歴史や文化を活かしたまちづくりが進められている。その船場地区に位置する「三休橋筋」でも様々な主体が関わるまちづくり活動がおこなわれており、近年レストランなどの賑わいを生む施設の立地が増加しているように感じられる。また大阪市によるプロムナード整備によって歩道が拡張され、ガス燈の灯る「ひと」中心の道へと変貌した。

本稿では三休橋筋における空間変容の状況を把握し、まちづくり活動との関係性を明らかにするとともに、様々な主体が関わるまちづくり活動の進展や変化について考えてみる。

2. 三休橋筋の現状

「三休橋筋」は次ページ上図のとおり、大阪の歴史的都心部である「船場地区」の真ん中を南北に貫く約2kmの道路である。大阪都心部の幹線道路である御堂筋と堺筋との間にあり、北端は中之島の大阪市立中央公会堂、南端は長堀通りとなっている。御堂筋と同時期（昭和初期）に拡張され、船場地区の中では数少ない歩道を有し街路樹のある適度な幅員の道路である。沿道には中層のオフィスビルが立ち並ぶ中に、歴史的建築物や低層の木造建物も点在しており、高層ビルに建て替わった足元には公開空地が広がり、ヒューマンスケールのまちなみを形成している（次ページ写真右）。

その三休橋筋では2000年頃にまちづくり活動が始まった。当初は筆者がメンバーの一人である「三休橋筋愛好会」というボランティアな活動だけであったが、活動が進むにつれて行政機関や地元組織など様々な主体が関わり、大きな動きに進化してきた。そのなかで、大阪市による“プロムナード整備事業”や企業による“ガス燈設置”が実現した（次ページ写真左）。また2000年当時は業務機能中心であったまちに、飲食などの店舗が多く立地するようなまちへと変容してきている。



三休橋筋は御堂筋と堺筋の間、いわば「船場の背骨」に位置している



プロムナード整備前の三休橋筋。当時から歴史的建築物や街路樹が美しいヒューマンスケールの魅力的な道であった（写真上）
企業からの寄付により、55本のガス灯が設置され、より魅力アップした三休橋筋（写真左）

*写真提供：大阪ええはがき研究会

3. 三休橋筋における空間変容

三休橋筋のまちづくり活動に15年関わっている中で、近年カフェやレストランが増えてきたと実感しているが、果たして事実なのだろうか。それを定量的に検証してみた。空間変容の大きな要素である三休橋筋沿道の建物用途について、特にまちへの影響が大きい1階部分に着目して、過去の住宅地図を用いて整理してみた(注1)。また公共空間の変容として、大阪市によるプロムナード整備と民間企業の寄贈によるガス灯設置を時系列的に次ページ(2)で整理した。

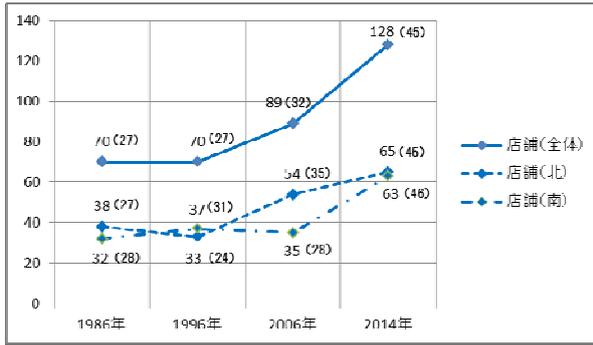
*注1：1986年、96年、2006年、2014年の住宅地図から1階部分の用途を業種ごとに分類し、その件数をカウント、時系列的な変化を把握。

(1) 沿道建物1階部分の用途の変化

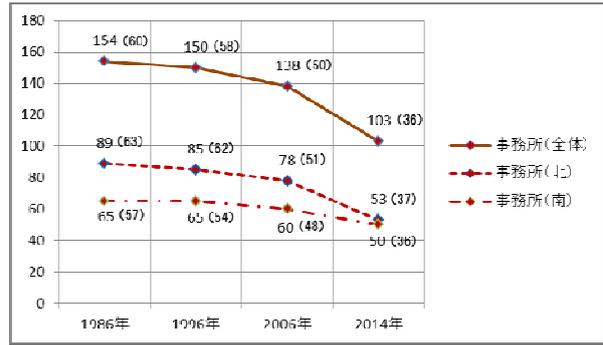
86年、96年、06年、14年時点の、主な業種(店舗、事務所)ごとの件数と構成比(=ストックの変化)を次ページのグラフ1, 2に示す。また前回時点から変化した区画を対象に主な業種ごとの構成比(=フローの変化)をグラフ3, 4に示す。さらにプロムナード整備とガス灯設置の影響を把握するために、整備が実施された北エリアと実施されていない南エリアの値も各グラフに記した。結果として、

- ・全体店舗件数は86年70件から14年128件へと約1.8倍に増加し、構成比も27%から45%へと約1.7倍に増加。
- ・全体事務所件数は86年154件から14年103件へと約2/3に減少し、構成比も60%から36%へと約3/5に減少。
- ・北エリアの店舗件数は06年に顕著な増加(33→54)が見られ、14年でさらに増加
- ・南エリアの店舗件数は06年には際立った変化はなく、14年に大きく増加(35→63)
- ・建物用途が変化した区画の内、店舗への変化は06年までは3割程度であったが、14年には6割強に急増
- ・建物用途が変化した区画の内、事務所への変化は06年までは5割前後であったが、14年には2割程度に減少

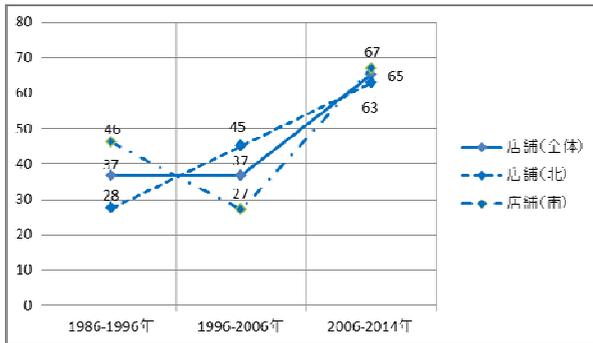
ということが明らかになった。



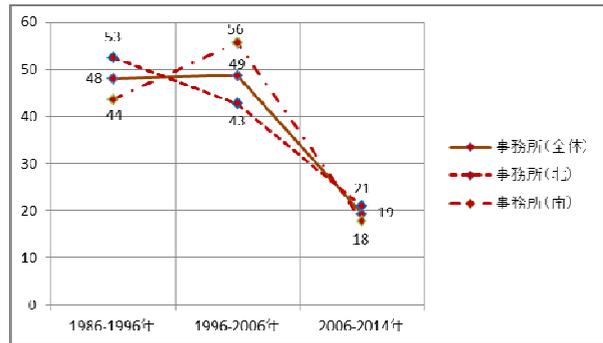
グラフ1：建物1階部分の店舗数（単位：件）
カッコ内は構成比（単位：%）



グラフ2：建物1階部分の事務所数（単位：件）
カッコ内は構成比（単位：%）



グラフ3：建物1階部分でテナントが入れ替わった区画
における店舗比率（単位：%）



グラフ4：建物1階部分でテナントが入れ替わった区画
における事務所比率（単位：%）

(2) 公共空間の変化

大阪市建設局では2003年に三休橋筋のプロムナード整備構想（電線地中化、歩道拡幅、車道削減）が浮上し、2006年に着工、2012年に竣工した。またプロムナード整備に合わせて企業からガス燈寄贈の計画が持ち上がり、協議の結果、地元組織への寄贈が決定し、整備工事に合わせて順次設置し、2012年に設置完了した。その前後の変化は下の写真のとおりである。



*写真提供：三休橋筋愛好会

(3) 空間変容についてのまとめ

三休橋筋では2000年頃からまちづくり活動が始まり、年々その担い手が拡大し大きな動きへと進化してきたのであるが、その動きに合わせるように空間変容が活発になり、まちに賑わいを創出する店舗の立地が加速してきた。また活動の結果として公共空間整備も進んだのであるが、公共空間整備がおこなわれた北エリアのほうが、おこなわれなかった南エリアに比べて早期（06年以前）に空間変容が生じたことも明らかになった。

4. 三休橋筋におけるまちづくり活動

筆者が関わっている三休橋筋愛好会等の活動について、活動記録等から時系列的に整理し、活動が進展した要因の一端を把握するために、様々なまちづくりの主体の担った役割や連携の仕方などについて考えてみる。

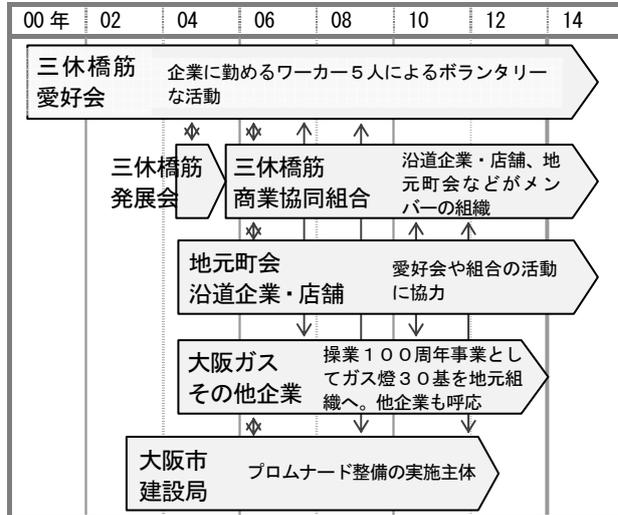
(1) 活動主体

三休橋筋のまちづくり活動に関わる各種主体の概要と主体間の関係を下図に示した。

(2) まちづくり活動実績

三休橋筋でのまちづくり活動を6ページの一覧表にまとめた。まちづくり活動の主体を①愛好会、②地元まちづくり組織である三休橋筋発展会・三休橋筋商業協同組合、③地元の町会・沿道企業・店舗、④大阪ガス等の関連企業、⑤大阪市建設局等の行政機関、⑥その他関係者の6者に分類し表中に記した。横軸は「活動」と「空間整備」に分類し、主要な項目（活動として、愛好会の活動、組織設立、イベント、メディア掲載の4項目、空間整備として道路整備、ガス灯設置、沿道への出店の3項目）に分けた。縦軸は愛好会が活動を始めた2000年から現時点（2014年）とした。

2000～2004年までは「愛好会によるまちづくり活動の立ち上げ」の時期であり、2004年に組織が設立され道路整備が動き出した。2004～2007年までは、「プロムナード整備・ガス灯設置に向け活発に活動」した時期であり、2007年に1期工事が竣工し、ガス灯点灯式典がおこなわれ、愛好会の「三休橋筋マップ」第1号が発行された。2007～2013年までは「それぞれの組織が自律的に活動」した時期である。そして2014年に55本のガス灯全灯が点灯し、これからは「持続可能な活動へ」向かう時期となっている。



各種主体の概要と主体間の関係



プロムナード整備では大阪市建設局主催の舗装材選定会が開かれ、組合や沿道企業の人たちが実物を見ながら選定した。

*写真提供：三休橋筋愛好会

(3) 各主体の関係性について

6ページの一覧表から読み取れる各種主体の関係を以下に整理してみた。

i) 勝手連的活動が初動期に果たした役割 (図中Aのチャート)

三休橋筋愛好会が勝手連的に活動を開始し、様々な団体と交流することにより、地元組織の設立や大阪市によるプロムナード整備、大阪ガス等によるガス灯設置へと結実していった。

ii) ボードメンバー的機能の果たした役割 (図中Bのチャート)

三休橋筋商業協同組合の主要メンバーは自らリスクを負いながら、沿道に出店イベントを主催することにより、周囲の関係者を巻き込み、活動を前進させた。

iii) メディア掲載等情報発信による認知度アップ (図中Cのチャート)

メディアからの取材に適切に対応し、他団体からの講演依頼にすべて応じることにより、三休橋筋の認知度が向上し、好循環につながった。

5. まとめ

三休橋筋におけるおよそ15年間の活動を振り返ると共に、その間に生じた空間変容との関係を明らかにし、以下の結論を得た。

- ① 三休橋筋ではまちづくり活動が賑わい創出に資する建物用途変化や公共空間整備を誘発した
- ② 勝手連的活動は他者の賛同を得やすく、連携を促進し、新たな活動を生み出すきっかけとなり得る
- ③ 活動の要となる主体(=ボードメンバー)の存在は活動の推進力になり得る
- ④ 活動の露出度を高めることは、まちづくり活動の好循環を生み出す

以上、三休橋筋を対象にさまざまな担い手の自律的活動の積み重ねによるまちの変容について、空間変容の視点とまちづくり活動の視点で述べてきたが、まだまだ根拠が薄く分析も不十分であると認識している。空間変容の要因については、まちづくり活動以外にも都心居住の進展など船場地域全体に関わる環境変化も考えられるため、対象店舗の経営者へのアンケート調査などにより、要因分析を深めることが必要と感じている。またまちづくり活動については、立場の異なる様々な主体へのヒアリング等を通じて、主体間の関係性の分析を進めることが肝要であろう。筆者は現在大阪大学大学院に社会人ドクターとして在籍しており、これらの課題についての研究をおこなっている。機会があれば続報として報告できれば幸いである。

最後に、三休橋筋のまちづくり活動は現在定着期に入り、それぞれの主体によって自律的活動が展開され、活動の幅は広がっているが、主体間の連携による新しい活動を生み出すパワーは低下していると思われる。持続可能な活動を実現するためには、かつて「ガス燈通りの実現」に向けて様々な主体が連携して活動したときのような「共通の目標」を見つけ、それぞれの自律的活動と並行して、その目標の実現に向けた連携活動をおこなうことが大切なのではないだろうか。



写真提供：三休橋筋愛好会

■筆者略歴

1958 年生まれ。大阪南部の羽衣出身。神戸市在住。京都大学大学院建築学専攻修了後、大阪ガス(株)に入社。1989 年より都市開発、社有地開発関連の業務に従事し、大阪ドーム、U S J などのプロジェクトに携わる。2000 年より大阪都心部にて三休橋筋愛好会、大阪ええはがき研究会、御堂筋まちづくりネットワークなどの活動に関わる。2004～07 年大阪大学客員教員兼務。2010 年より姫路地区支配人として、姫路商工会議所や姫路観光コンベンションビューロー、姫路駅前広場活用協議会など、活動フィールドを姫路に広げ、まちづくり活動を実践してきた。2014 年より大阪地区支配人。また現在大阪大学大学院に社会人ドクターとして在籍。技術士（都市及び地方計画）、1 級建築士。

発行元・問合せ先 公益財団法人都市活力研究所
〒530-0011 大阪市北区大深町 3 番 1 号
グランフロント大阪 ナレッジキャピタル タワーC 7F
TEL 06-6359-1322/FAX 06-6359-1329